

コメント①

大学史編纂事業の意義と役割を考える

瀬戸口 龍一

- 一 大学史編纂物の分類
- 二 専修大学が刊行した大学史編纂物
- 三 『専修大学の歴史』の編纂目的
- 四 専修大学における自校史教育
- 五 大学史編纂事業が果たす役割

先ほど寺崎先生から「大学沿革史編纂の効用を考える」というタイトルで基調講演を頂きましたが、私の方からは専修大学で『専修大学の歴史』という本を編纂した経験を基に、大学史編纂事業がどういう意味を持つのかを話していきたいと思います。

一 大学史編纂物の分類

『専修大学の歴史』は、専修大学が創立一三〇年記念事業の一環として五年前に作った本です。この本を作る上で、多くの大学の沿革史を参考にしました。

これまで、大学が周年事業の一環として編纂してきた沿革史を大きく分類すると、百年史のように大部なもの、写真をふんだんに使ったもの、そして資料集の三つに分かれますと言えるかと思えます。しかし、近年は、名古屋大学もそうですが、ブックレットのようなものや、自校史授業用の教科書のようなものを編纂する大学も増えてきました。また、最近ではマンガという形で自校の歴史を紹介する学校も出てきています。つまり、これまで沿革史というと周年事業の際にしか作られないことが多かったわけですが、そうではない大学史に関する編纂物が作られるようになったと言えるでしょう。

スライドを見てください。先ほど話した百年史の代表とも言える『東京大学百年史』です。全一〇巻あります（スライド三枚目）。写真集にはこういったものがあります（スライド四枚目）。最近の学生は文字を読まなくなっているのです、古い学校の写真や学生の姿などの写真を駆使したビジュアル中心の本だと大学史にあまり興味のない

学生などにも非常に好まれます。次は資料集です（スライド五枚目）。百年史などを編纂した際に集めた資料をこういう形で出している学校も多くあります。そしてこれが名古屋大学が作っているブックレットタイプです（スライド六枚目）。手軽に読めるという点で、近年多くの大学で採用されています。

これが教科書用として作られた沿革史ですが（スライド七枚目）、専修大学は『立教大学の歴史』を参考に作りました。

最後がマンガタイプです（スライド八枚目）。これは追手門学院が附属の高校生や中学生に向けて、自分の学校の歴史を知ってもらおうとした一つの試みと言えます。

このように様々なタイプの沿革史があります。

二 専修大学が刊行した大学史編纂物

専修大学は現在、一三五年という歴史を持っています。沿革史の編纂について言えば、古くは創立五〇年と七〇年の際に小冊子を出していますが、本格的に作り始めたのは創立八〇年の時からです。百年史は、他校と同様に非常に分厚い本で、上下二巻から成っていますが、それ以外はほとんど写真集という形で、一二五年までほぼ五年おきに作っています。

一三〇年史の編纂企画が持ち上がった際、こうした経緯を勘案しつつ、これまで出してきた写真集は果たして専修大学の歴史をきちんと理解してもらおうための役割を果たしてきたのか、そして一三〇年史を、これまで出してきた

た写真集を含めた沿革史とどう違うものにしたらよいのか、という検証を始めました。

三 『専修大学の歴史』の編纂目的

これまで専修大学の沿革史はいつも同じような写真集タイプばかりでした。なぜかというところ、それは確たる目的も方針もなく、前回から五年たったのでとりあえず作ろうというような惰性のなかで編纂が進められてきたことがその原因ではないかという自己反省をまず私達はしました。それこそ先ほど寺崎先生が言われたように、記念式典のための引き出物として作っていたと言っても良いかも知れません。その内容も編纂もほとんど外部の印刷会社に委託し、そのため金額だけはかなりかかっていました。これでは一三〇年という古い歴史を持つ専修大学として非常に恥ずかしいので、まず五年ごとの写真集作りはやめよう、そして一三〇年史はきちんとした目的を持った沿革史として編纂しようということが理事長の合意のもと決定されました。その結果、出来上がったのが『専修大学の歴史』です。

当初は『専修大学一三〇年記念誌』と名付けられていましたが、学内で行われた何回かの編纂会議を経て次のような事項が決定されました。それは、これまでの写真集が沢山あるので写真集にはしないこと。広く専修大学の歴史を知ってもらうために出版社から刊行・販売すること。内容は新書レベルの読み物とし、学生や卒業生の動向を盛り込むことと単なる一大学の歴史を描くのではなく、専修大学や学生、卒業生の歴史を日本近現代史の中にきちんと落とし込むこと、などです。さらに、専修大学の歴史を学生に知ってもらうために、自校史教育を始めること

も決定されました。

こうした編纂目的、つまり専修大学が明治一三年に創立されてから、日本の歴史の中でどういう役割を果たしてきたのか、卒業生が社会の中でどういう役割を果たしてきたのかを広く紹介したいという目的のために、あえて「一三〇年」という言葉も使用しないということになりました。一三〇年と付けてしまうと周年事業に縛られてしまいます。つまりこうした事業は周年事業ではなく永続的に進めていくことが大切だからという理由からです。さらに一三〇年とか一三〇年と銘打つと、その時期が過ぎてしまうと、配布や販売がしにくくなってしまおうという理由もあります。そこで、名称を『専修大学の歴史』として、必要に応じて内容を改訂するというような形がいいのではないかということになったのです。

四 専修大学における自校史教育

一三〇年史編纂を機に自校史教育を始めようという声が挙がり、それではどのようにして講座を開くのが良いかを編纂に関わっていた教員に相談しました。幸いなことに多くの大学でも自校史教育が始まっていたので、立教大学や明治大学などを参考にして、対象を全学部全学年にすることが決定されました。そして他大学と比べると非常に遅いのですが、平成二〇年に「専修大学の歴史」という講座名で自校史教育を開始しました。創立一三〇年の前年です。最初の年はかつて名古屋大学の資料室に在籍して、今は愛知大学にいらつしやる神谷智先生にも外部講師として話をいただきましたが、そのほかの講師は基本的に『専修大学の歴史』の執筆者にお願いしました。

執筆者は、原稿を書いている最中に学生に対して授業を行い、その授業で自分たちの考えを学生に聞いてもらい、その反応を見た上で、また書き進めるといふようにしたので。

そして平成二一年に『専修大学の歴史』は刊行したので、翌年からの授業「専修大学の歴史」では『専修大学の歴史』をずっと教科書として使用しています。授業の形態としては当初、通年四単位で始めたのですが、もつと学生が受講しやすいようにした方が良くはないかという意見が出たため、半期二単位の科目とし、専修大学は生田キャンパスと神田キャンパスに別れているので、両方のキャンパスで開講することにしました。先ほどの寺崎先生の話ではないですが、専修大学も男子は明治大学、法政大学などの滑り止め、女子は成城大学、成蹊大学など、他大学の滑り止めとして受験する学生も多く、専修大学を第一志望として入学してきた学生はそれほど多くはいません。こうしたスクールアイデンティティの問題については中堅私大はどれも同じような悩みを抱えていると思います。だからこそこうした授業によつて自校を知ってもらうことには大きな意義があると思っています。

今年からは新たな学士課程教育として、「専修大学入門ゼミナール」という半期講座を一年生全員に必修化しました。全一三回あるのですが、その中の一回か二回を「専修大学の歴史」という内容で各担当の教員に話をしてもらいます。そうすると、『専修大学の歴史』はポリウムがあるので、使いづらいという意見が教員から出ているため、一〜二回の授業に使えるようなブックレット、もしくはパンフレット程度で大学の歴史がわかるような編纂物を現在、計画しています。

このように専修大学では一三〇年を機に『専修大学の歴史』という本を作ったのですが、なぜこうした本にしたのかを改めて話せば、自校史教育の必要性という大きな問題があつたということ。だから教科書タイプにしました。また、出版社から刊行したのは、出来るだけ「専修大学」という名前を広めたかつたからです。例えば全国の大き

な書店の店頭に並ぶ。新聞の書籍広告や書評に載ることもあります。せつかく作るのであれば広報の役目を果たして欲しいというわけです。しかしそのため出版社からは、一大学の歴史を「うちが出すの?」という意見も言われました。幾つか出版社に掛け合った結果、平凡社が引き受けてくれたのです。専修大学はそれなりの歴史もありまし、卒業生の数も多いので、保護者や卒業生の組織などを対象に販売する形を取りました。お陰様で卒業生からの問い合わせも、本屋さんで母校の名前を見て嬉しかったという感想もいただきました。これまで大学沿革史が大手の出版社から刊行された例はそれほどありません。その意味では良い試みであつたと思います。

五 大学史編纂事業が果たす役割

最後に大学史編纂事業の意義と役割についての私の意見を話して終わりたいと思います。これからの大学史編纂事業は、何のために、誰のために作るのかという点を明確にしていけないといけないと考えています。それがないとこれまでの専修大学のように学内からも無駄遣いなんじゃないのと言われてしまうことになりかねません。創立五〇年、創立一〇〇年という節目の年だから作ろう、他の大学も作っているから作ろうという理由だけでは、専修大学のようになってしまうと思います。もちろん周年事業は大学史の意義を改めて考える良い機会です。編纂物の刊行にも普段は出してくれない金額を捻出してくれます。だからこそより良い編纂物を作るために、自校史授業を始めるでも良いですし、中高生にももつと自校を知ってもらいたいでも良いと思います。目的を明確化した上で編纂物を作っていく必要があるのではないのでしょうか。そのほかにも大学自体が何を求めているのかを考え、それに対して

アーカイブズに何が出来るかを考える必要もあるでしょう。

専修大学はたくさん沿革史を出しています。一九六〇年ぐらいから始まりました。専修大学は日東駒専と呼ばれることが多いですが、どの大学でも他大学との差別化をどのように図っていくかは大きな問題の一つだと思います。専修大学のための方法の一つとして歴史の古さをアピールしてきました。創立一三五年という歴史を持つ大学はそれほど多くはありません。ですから、これほど多くの沿革史を作ることを学校側も許してくれたと言えるでしょう。ただ、それだけの理由でこんなに出す必要があるのかという意見を多く聞きますし、私でさえもそう思うことがあります。

今、専修大学は創立一五〇年に向けて、『専修大学史資料集』を作り始めています。これは一五〇年を迎える年、二〇二九年に全一〇巻となる予定ですが、これまで専修大学は百年史、写真集、教科書を編纂してきました。そうした編纂の際に収集してきた史料や、専修大学が所蔵している史料が、少しでも大学史研究に還元したいと思いついた試みを始めました。大学史編纂事業をどのようなやり方で行うかは、当然、個々の大学が決めることだと思いますが、大学が持つビジョンと大学史編纂事業が相互に連携していくことも大切なことだと私自身は考えています。『専修大学の歴史』を編纂したことによって大学自身も求めていた自校史教育が開始されたことは非常に大きな意義であると考えていますし、その意味で連携ということも言えるでしょう。それこそが大学史編纂事業が果たした役割の一つではないでしょうか。

本日お話ししたのは、専修大学の例で、どこまで他の大学の参考なるかどうかはわかりません。あくまでも東京にある一中堅私立大学がどのような形で大学史編纂事業を考え、行っているのかというお話しをさせていただきました。ご参考になれば幸いです。

(せとぐち・りゅういち 専修大学大学史資料課)



大学史編纂事業 の意義と役割を 考える

平成26年11月26日
第2回 名古屋大学 大学文書資料室シンポジウム
瀬戸口龍一（専修大学大学史資料課）

〔 1 〕

大学史編纂物の分類

- (1) 百年史タイプ
- (2) 写真集タイプ
- (3) 史料集タイプ
 - ※百年史編纂のために収集した史料を紹介
 - これまで、このタイプがほとんどであった
- (4) ブックレットタイプ
- (5) 自校史授業用教科書タイプ
- (6) マンガタイプ など

近年、このように様々なタイプの大学史編纂物が制作されるようになった

→周年事業に限らない大学史編纂物の刊行が増えた

〔 2 〕

(1) 百年史タイプ



(特徴) ハードカバーで大部であること。大学によっては自治体史と同様に通史編および史料編を刊行

3

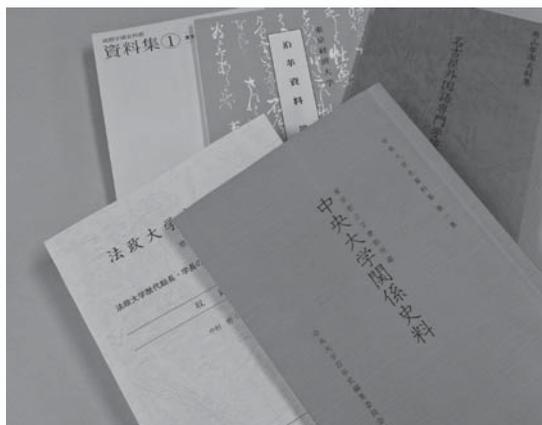
(2) 写真集タイプ



(特徴) 文字でなく写真を中心とすることで視覚に訴えかける見やすい体裁をとっていること

4

(3) 史料集タイプ



(特徴) 大学史編纂事業を通して収集した史料を研究者や大学史に深い関心を持つ人々に向けて紹介

[5]

(4) ブックレットタイプ



(特徴) 文字数の少ない小冊子にすることで気軽に読むことができること。幅広い読者層を想定

[6]

(5) 自校史授業用教科書タイプ



(特徴) 百年史タイプのように大部でないが、ブックレットタイプよりも文字数を増やし、内容を充実。

[7]

(6) マンガタイプ



(特徴) 従来の編纂物より低年齢層（中学生や高校生）まで読者対象としていること

[8]

専修大学が刊行した大学史編纂物

- 『専修大学八十年小史』昭和34年10月30日（写真集）
『専修大学八十五年小史』昭和39年10月30日（写真集）
『専修大学九十年小史』昭和44年10月30日（写真集）
『専修大学百年小史』昭和54年8月20日（写真集）
『専修大学百年史』上下巻 昭和56年3月31日（百年史）
『専修大学105年』昭和59年9月10日（写真集）
『専修大学110年』平成元年8月（写真集）
『専修大学115年』平成6年8月20日（写真集）
『専修大学120年』平成11年12月15日（写真集）
『専修大学125年』平成17年2月25日（写真集）
『専修大学の歴史』平成21年9月16日（教科書）
『専修大学松戸高等学校50年のあゆみ』平成22年10月19日
『専修大学史資料集 第3巻 五大法律学校の時代』平成25年10月30日

〔 9 〕

『専修大学の歴史』の編纂目的

専修大学では、『専修大学百年史 上下巻』刊行以降、5年ごとにビジュアル中心の写真集タイプの記念誌を刊行
→時期が来たので刊行してきたという例のまさに典型。
編纂のほとんどを業者に依頼してきたため毎回同じような内容

- ・創立130年記念誌は当初より以下の点を考慮して編纂
出版社から刊行すること
新書レベルの読み物とすること
大学史教育の一環に組み入れること
卒業生の動向を取り入れること
大学の歴史を日本近現代史に組み入れること
→『専修大学の歴史』として刊行
※130年という名称はあえて外した

〔 10 〕

専修大学における自校教育

- ①平成20年度 総合科目「日本の大学史の中の専修大学」
4単位・前期・生田
ただし『専修大学の歴史』は未刊行
- ②平成21年以降は
教養特殊講座「専修大学の歴史」として開講
2単位・半期・生田と神田両方で
教科書として『専修大学の歴史』を使用
- ③平成26年度からは「新たな学士課程教育」の導入
全学部に「専修大学入門ゼミナール」を必修化
この授業のなかで「専修大学の歴史」を1回ないし2回
を行うことが義務づけられた。
※しかし『専修大学の歴史』では分量が多いとの意見が
出され、現在、ブックレットもしくはパンフレットの
ような形で大学史編纂物の刊行を検討中。

〔 11 〕

大学史編纂事業が果たす役割

編纂目的の明確化

→誰のため、何のため

大学が持つビジョンとの連携が必要

- ・従来の大学史編纂物の制作理由
創立50年経ったから、100年経ったから
ほかの大学も作成しているから
- ・近年の大学史編纂物の制作理由
自校史授業の開始にともなって
中高生に対する宣伝のために
卒業生の寄附行為を促進のため など

〔 12 〕

※大学史編纂事業の目的や想定読者対象は多様化